

けない。世界に先駆けて高齢化している日本の中でも、高齢者に焦点を当ててやっていくとして自治体では、それを意識しなくてはいけないというのが、まさに2000年代に大きく動いた価値観の変化だと思います。人とのつながりや信頼関係であったり、信頼が生まれ出す安全・安心な状況であったり。それを創りだしていくことが、幸せを創りだす一番の土台になっていくと思います。

市長：「幸せとは」と市民の皆さんに問いかけると、やはり、まちが安全・安心であることだという声が多く寄せられます。もちろんそれは重要な点ですが、今おっしゃっている安全・安心とは、道路整備や防潮堤などという部分とは違う切り口ですね。

山崎さん：そうですね。やはりハードではなく、国土強靱化とはまた違う視点で幸せの土台をどう作るのかということですね。例えば監視カメラや柵がブーツといった



山崎 亮 (やまざきりょう)
コミュニティデザイナー
Studio-L 代表、東北芸術工科大学教授
(コミュニティデザイン学科長)
1973年愛知県生まれ
地域が抱える課題をそこに住む人が解決するためのコミュニティデザインに携わる。「海士町総合振興計画」[マルヤガーデンズ]「震災+ design」でグッドデザイン賞受賞。著書は「コミュニティデザイン 一人がつながるしくみをつくる」(学芸出版社)他がある。TBS「情熱大陸」NHK「東北発☆未来塾」などテレビ出演も多数。

いあるまちに住んでいて安心かというところ、そうじゃないはず。信頼できる人とどれくらい知り合っていて、どこから先が危険なのかが

わかるということが安心につながるわけ。情報をどれだけ得られているかも影響していると思う。その安心の土台を形成するものが一体何で、さらにその土台の上で人と人がつながって新しくワクワクできるものがあるとか、一歩外に出て誰かと語り合って笑顔になれるとか、そもそも家を出るきっかけを作る「何か」がすごく大事な気がします。その辺にまちづくりというのは大きく寄与できる。まちづくりは都市計画や産業振興のためではなく、社会福祉や社会教育のためでもないけれど、たぶんその全部に影響するようになっていて、じゃあ何のためかという「人々の幸せ度をあげるためにやっている。」となると思います。

自分たちが、かかわるって

市長：私は詩人の相田みつを(※3)さんの「幸せはいつも自分の心が決める」という言葉をまさにその



(上)芳川町海岸で行われている「海の生き物観察」。海辺の環境をテーマにした団体「渡し場かもめ会」が主催
(下)「昭和で元気になる会」の回想法を使った事業

とおりだと思っています。自分の心が決めて形がないものですから、それを構成するものは何かと考えるといういろいろなことがある。「行政というのは住民を幸せにするシステムである」という考え方がありますが、我々がすべきことは、山崎さんがおっしゃった「地域において皆さんが幸せと感ずることはそれぞれ違うだろうが、どうしたら幸せと思えるんだろうっ。」を考えること。「幸せですか?」に「Yes」と答えてもらう

(※3) 相田みつを (1924~1991)
詩人。代表作は「にんげんだもの」